



青い目の人形

「メリーブランナー」

1920年代半ば
七宗町立上麻生小学校蔵

「パッテロー」

1920年代半ば
八百津町立和知小学校蔵

昭和2年（1927）、アメリカ人宣教師ギューリックが中心となり、日米親善の「友情人形」（「青い目の人形」）12,739体が日本の子どもたちへ贈られました。岐阜県にもこのうち約250体が届き、各地の学校で熱烈な歓迎を受けました。ところが、やがて戦争によって日米の対立が深まると、「敵国の人形」と批判され、多くが廃棄されてしまいます。

しかし、そうした中でも密かに守り抜かれてきた人形が現在全国で300体余り確認されており、岐阜県にも2体が残されています。これらの人形は、寝かせると目を閉じるスリーピングドールで、1体1体にそれぞれ名前が付けられていました。7月16日から開催の企画展「学制発布150年記念 岐阜の学び舎150年」では、岐阜県下に残された「青い目の人形」2体とともに展示いたします。

企画展

学制発布150年記念 岐阜の学び舎150年

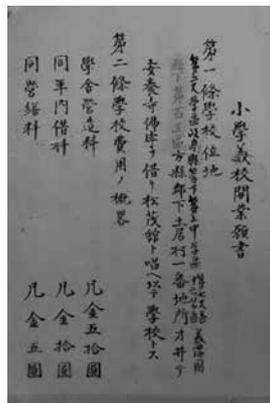
2022.7.16(土)～8.28(日)

明治5年(1872)、近代的学校制度について日本で初めて定めた「学制」が発布されました。これによって、全国に設置すべき学校の総数が明示され、岐阜県内でも多くの学校が設立されました。令和4年(2022)は、「学制」発布からちょうど150年の節目の年となります。岐阜市域においても、これから多くの小学校が創立150周年を迎えます。今回の企画展では、市内の小学校に残された資料などを中心に、近代以降における学校制度の移り変わりや学校の歴史についてご紹介いたします。

【「学制」の発布と小学校の設立】

明治政府が掲げた「学制」は、「邑(村)ニ不学ノ戸ナク」とあるように、身分や性別などに関わらず、すべての国民が小学校教育を受ける「国民皆学」を目指すものでした。当時、文部省は「学制」実施に向けた優先順位の第一に小学校の設立を掲げており、明治5年末頃から岐阜県内でも小学校設立に向けた動きが本格化していきます。

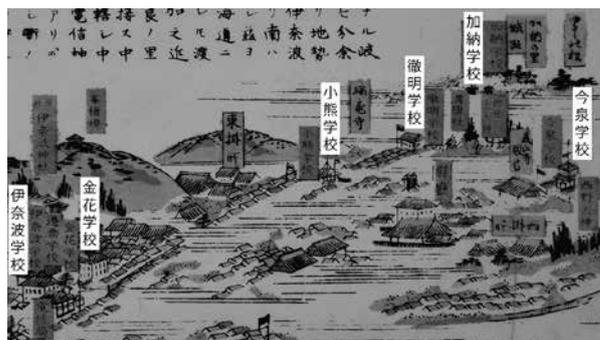
右は、明治6年に県へ提出された松茂学校(現在の常盤小)の開業願書です。第一条の最後に、「安養寺仏宇ヲ借り松茂館ト唱ヘ以テ学校トス」とあることから、当初は寺院の建物を借りる形で学校が開かれたようです。



小学義校開業願書
明治6年

松茂学校のように、「学制」発布直後に設立された小学校ではまだ新しい校舎が用意できていない場合が多く、一時的に旧役所や寺院、民家などを借りて授業が行われました。しかし、これと同時に新校舎の建設も多くの学校で進められたようで、明治9年には市域の小学校のうち4割以上が新築校舎を持っていました。

当時の岐阜町の様子を北側から捉えた鳥瞰図にも、学校の校舎がはっきりと描かれています。



岐阜町鳥瞰図(部分)
明治7年

右上には「^{いまいずみ}今泉学校」(現在の明郷小)、左下には「^{きんか}金花学校」・「^{いなば}伊奈波学校」(ともに現在の岐阜小)などの姿が確認できます。同図には他にもいくつかの学校が描かれていますが、それらの多くが当時目新しかった洋風建築の2階建て校舎でした。鳥瞰図に描かれていることからわかるように、当時の学校は町のランドマークの一つでもありました。



明治10年頃の伊奈波学校(宮内庁書陵部蔵『岐阜県師範学校並同県下小学校写真帖』)

【学校日誌に見る学校の“記憶”】

明治から現代に至るまでの学校の歩みを物語る史料として、学校日誌が挙げられます。学校における日々の出来事などを記録した帳簿で、明治時代にはすでに、学校が必ず備え付けなければならないものとして定められていました。



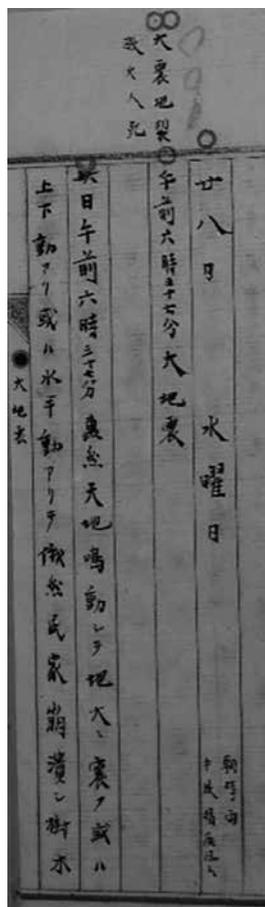
学校日誌（現在の岐阜小） 明治～昭和時代

《濃尾震災》

明治24年10月28日早朝、マグニチュード8.0の大地震が濃尾平野を襲いました。

岐阜尋常小学校（現在の岐阜小）の当日の学校日誌には、欄外上部に「大震」・「地裂」・「激火」・「人死」と書かれており、被害の甚大さを物語っています。

また、この次のページには、午後三時に校舎が全焼し、書籍や器具・機械などがことごとく焼失したことが記録されています。このように、濃尾震災が市域の小学校にも大きな被害を及ぼしていたことが、当時の学校日誌から確認できます。



岐阜尋常小学校日誌
明治24年

《運動会》

学校日誌には、公開授業・校外学習・運動会など、学校行事の記録も豊富に残されています。運動会は、岐阜県下でも明治20年代ごろから行われるようになりました。

明治30年10月24日の岐阜尋常小学校の学校日誌には、運動会実施の記述とともに、「遊戯順序表」（プログラム）が掲載されています。これを見ると、「二人三脚」や「二百メートル競走」、「綱引」など、現代でも馴染みのある種目が多く見られます。一方で、「提灯競争」（火を灯した提灯を持ち、火を消さずにゴールに到達する速さを競う競技）や「文字書競走」（スタート前に紙と鉛筆と問題を与え、ゴールに到達する速さと解答の正確さを競う競技）など、現代ではほとんど見られない競技もありました。

《学校名の移り変わり》

学制発布後150年の中で、小学校の名称も、時代の影響を受けながら変化してきました。

学制発布直後に設立された市域の小学校の多くは、地域の人々からの寄付金を中心に運営されていたため、「〇〇義校」や「〇〇小学義校」という名称が用いられていました。その後、明治19年の小学校令の発布により、「〇〇尋常小学校」という名称へと変化していきます。さらに、戦時中の昭和16年（1941）には、国民学校令の発布によって、「〇〇国民学校」という名称を用いることが定められました。そして戦後、昭和22年の学制改革により、現代につながる「〇〇小学校」という名称へと移り変わります。

このように、明治5年の「学制」発布から今日に至るまで、学校のあり方や学校を取り巻く環境も大きく変化を重ねてきました。

学校の創立、震災、戦争、そして復興、激動の150年をぜひ展示室にてご覧ください。

栄三・東一
鶺鴒に魅せられて

2022.6.28(火)~9.11(日)

岐阜市民のかけがえのない財産になっている鶺鴒の起源は古く、稲作とともに中国から伝わってきたとされる説など多々ありますが、8世紀初めには鶺鴒で獲れた鮎を天皇に献上していたようです。

また、長い歴史のなかで、高貴な客人の接待にも度々使われていました。

このような伝統を今に伝える鶺鴒は、多くの作家の題材にとりあげられ、作品として発表されてきました。

岐阜市美殿町出身の日本画家：加藤栄三・東一も鶺鴒に魅せられ多くのスケッチや本画作品を描いています。

毎年、鶺鴒が始まるこの時期に合わせ、第1展示室では、栄三・東一が描いた鶺鴒作品を展示します。



加藤栄三「鶺鴒（総がらみ）」

加藤栄三作「鶺鴒（総がらみ）」は鶺鴒を描いた作品の中で特に人気が高く、これまで幾度となく展示されてきた作品です。東洋画の特徴でもある多視点、逆遠近法で構成され、群青で塗りつぶされたバックは篝火の投影した箇所を一部入れることで水面を感じるように処理され

ています。煌びやかで高尚な篝火の特徴を表すため下地に金箔を施してあり、見る箇所によって違う色を感じるよう鶺鴒の絢爛さが際立つ作品に仕上がっています。

東一「総がらみ」は暗闇に浮かぶ金華山が印象的で長良川を下る鶺鴒舟のリズムや間（ま）が華やかさを一層引き立っています。黒を基調とした画面作りは東一芸術の神髄とも言え、晩年、東一が辿り着いた新境地であり、その画面構成から荘厳な感じを与える表現になっています。

東一が一艘の鶺鴒舟を描いた素描からもその幽玄さを感じ取るこ

とができます。本画とあわせてご鑑賞ください。

豪華絢爛とした鶺鴒のクライマックスでもある総がらみが終わり、篝火が消えた後のさみしさ。鶺鴒が華やかなほど、その模様が“ふっと”消えた時の悲しさ

を表現したいと語っている栄三・東一の作品からは、常にふるさと岐阜を忘れなかった気持ちを察することができます。

支配者としてのイメージが強い信長ですが、岐阜にいたころの信長は伝統文化を大切に、来客に対し鶺鴒観覧でもてなしたと言われています。最近、天皇家や朝廷に対しての支援を惜しまなかった信長の新しい側面がわかり、信長が大切に保護したといわれる長良川の鶺鴒は、ふるさと岐阜をこよなく愛した栄三・東一にとっても思い入れの深い光景となっています。

二人の画家が鶺鴒をどうとらえ、その心の中にどのように映ったか、この機会に作品をおおして是非ご鑑賞ください。



加藤東一
「鶺鴒（スケッチ）」

博物館ニュース

「歴博セレクション

博物館で旅気分!!～江戸時代の
旅行ブーム～」を開催しました

2022.6.4(土)～6.26(日)

歴博セレクション「博物館で旅気分!!」が6月26日で閉幕しました。当欄では、展示会に出陳した資料3点をご紹介します。と思います。

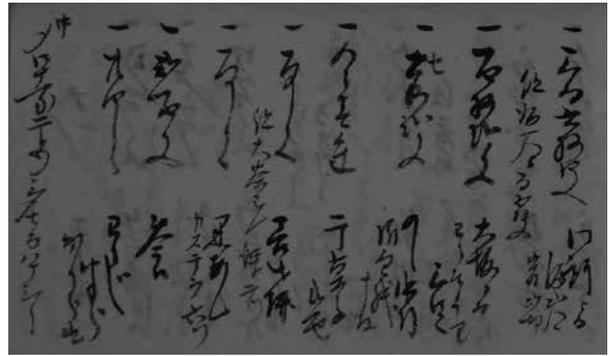


美濃国より大坂まで名所図巻
江戸時代後期 岐阜市歴史博物館蔵

まず、1つ目の「美濃国より大坂まで名所図巻」は、描かれた内容から、東国から大坂へ出張した役人の旅を記録したものと考えられます。

この作品で注目されるのは、出張中に案内人にガイドしてもらいながら、関ヶ原合戦場や不破関跡に立ち寄っていることです。武士の旅は原則として公用出張しか認められていなかったため、こうした機会に少しでも道中を楽しもうとしたのでしょう。

では、武士以外の旅はどのようなものだったのでしょうか。「きんせつ きこうざつ びちよう近撰驛行雑費帳」は、長良川役所の問屋役を勤めていた西川正規が大坂・京都を旅した時の日記で、旅中にかかった諸経費を書き残したものです。正規は、慶応3年(1867)9月20日から10月1日までの11日間、大坂・京都に滞在し、芝居を楽しんだり、時には干し菓

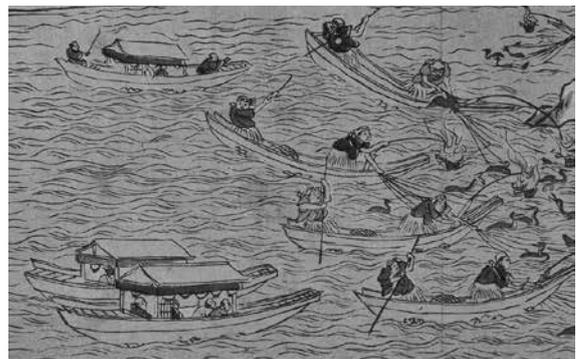


③ ② ①
近撰驛行雑費帳

慶応3年(1867) 岐阜市歴史博物館蔵

子(①)やぜんざい餅(②)、黒あんカステラ(③)に舌鼓を打ったり…と、旅を満喫していた様子が見えます。

さて、17世紀の終わりに来日したドイツ人医師のケンペルは、街道を行き交う人が多くいることを指摘し、その理由を「他の諸国民と違って、彼らが非常によく旅行することが原因である」(『江戸参府旅行日記』平凡社、1977年、49頁)と述べています。江戸時代中期以降はまさに「旅行ブーム」といった様相であり、レジャーとしての旅の萌芽がみられる時期でもあったのです。



濃州長良川鶺鴒ノ図
江戸時代後期 岐阜市歴史博物館蔵

ここ岐阜も、鶺鴒見物の広がりもあり、江戸時代には観光地として定着しつつあったようで、貞享5年(1688)には松尾芭蕉が岐阜町に滞在しています。また、「濃州長良川鶺鴒ノ図」には舟から鶺鴒を楽しむ人びとの姿が描かれ、今に通じる鶺鴒観覧のあり方が江戸時代には形成されつつあったことがうかがえます。

研究ノート

立政寺と淀稲葉家(前編)

中島 雄彦

はじめに

岐阜市歴史博物館では、立政寺様(岐阜市西荘)のご高配を得て、令和2年より什宝類の調査を行ってきた。その成果の一部は、今秋(9月17日~10月30日)の展覧会「立政寺の寺宝」においてご覧いただきたいと思うが、調査の過程で判ったことの一部を紹介したい。

1 狩野探信筆

「双龍図」

立政寺は、「立政寺縁起」(寛正5年<1464>成立、立政寺蔵)によれば、智通上人が文和2年(1353)に西荘に一庵を営んだことにはじまる。二条良基の縁で勅願寺となり、以後、二条家をはじめ近在の領主から平田西荘や市橋荘などの得分や堂宇を寄進されながら、浄土宗として寺院を経営してきた。江戸時代には徳川将軍家から50石の朱印地を安堵されている。

什宝類は、寺領に関係する古文書や南北朝期

以来の仏画が中心であるが、それらとは性格の異なる狩野探信筆の「双龍図」が伝来している。

対幅で、本紙の法量は各幅縦129.1 cm・横55.0 cmである。各幅ともに「立政寺印空代寄進 泰應」の寄進銘が入り、款記「狩野探信守政筆」がある。また、右幅に朱文外円内方印(印文不詳)と「藤原之印」朱文方印、左幅に「史淵之印」朱文外円内方印と「藤原之印」朱文方



左幅



右幅

印の落款が捺されている(次頁左段)。

狩野探信(1653~1718、号史淵)は、探幽(1602~1674)にはじまる鍛冶橋狩野家の二代目で、父が没した翌延宝3年(1675)に跡を継いだ(以下、七代探信守道と区別するため守政を用いる)。万治元年(1658)に四代将軍徳川家綱(1641



左幅



右幅

～1680)に御目見し、江戸城本丸障壁画や禁裏御所障壁画の制作に携わり、奥絵師として活躍した^(註1)。

印章は『鍛冶橋狩野家印譜』などでは確認できないが、右幅の構図は、狩野探幽筆「龍図」(東京国立博物館蔵)に倣ったように思われる。また、守政の描法に狩野常信

(1636～1713、守政の従兄)との近似性が指摘されており^(註1)、本作においても狩野常信筆「龍図」(東京国立博物館蔵)との類似点はいくつか看取できる。

2 稲葉正則

寄進銘の「泰應」は、稲葉正則(1623～1696)のことで、正則は天和元年(1681)に致仕して泰應と号した。父は稲葉正勝(1597～

1634)で、寛永11年(1634)正月に正勝が没したのち、遺領を継いだ。

本題に「淀稲葉家」と既述したが、当時の居城は小田原城で、4万5千石に加え、下野国芳賀郡、常陸国新治郡・真壁郡、駿河国駿河郡などに領知をもち、計8万5千石の譜代大名であった。正則の孫の正知(1685～1729)が享保8年(1723)に佐倉から淀に転封され、以後、幕末まで淀藩主として続いていく。

さて、正則は12歳で家督を継承したのち、同年(1634)12月に従五位下・美濃守に叙任。寛永13年(1636)に三代将軍徳川家光(1604～1651)の日光社参に供奉するなど、家光側近として活躍し、次の家綱時代には、幼年の将軍を支え、明暦3年(1657)に老中に就任している。この間、石高も11万石まで加増されている(正則没後に一族に分封され、10万2千石となる)。

(註1) 薄田大輔「江戸前期狩野派の歌繪について―狩野探信守政筆「井出玉川圖屏風」を中心に―」(『國華』第1395号、2012年)

※参考文献は次号に掲載します。

■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌4ページで紹介した以外の分館展示会は以下のとおりです。

・第2展示室

～7月24日(日) 松井 章 回顧展

7月26日(火)～9月11日(日) 抒情の旋律 稲元 実 日本画展

■本館特集展示(2階 総合展示内)■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2か月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

～8月14日(日) レトロモダンな広告デザイン

8月20日(土)～9月11日(日) 歌川国芳ワールド

■分室 原三溪記念室の展示■

～7月18日(月) 三溪の絵画

7月20日(水)～8月21日(日) 鶺鴒Ⅰ

8月23日(火)～9月25日(日) 鶺鴒Ⅱ

上記の日程は、都合により変更する場合がございます。ご了承ください。

令和3年度受贈資料

令和3年度は、表記の皆様に貴重な資料・作品をご寄贈賜りました。

厚くお礼申し上げます。(敬称略)

岐阜市歴史博物館

神谷 雅美	御殿飾り	一式
安田 喜紀	江崎村地引絵図	2 舗
近藤 万貴子	西郷村切絵図	3 冊
早川 万年	岐阜うちわ 岐阜提灯	2 点 1 点

加藤栄三・東一記念美術館

岩田 重計	加藤東一《星に香う》	1 点
杉山 幹夫	加藤栄三《流離の灯》	1 点

利用の御案内

■ **開館時間** 午前9時～午後5時
(歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館の入館は午後4時30分まで)

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始(12月28日～1月3日)
(月曜日が祝日の場合はその翌日)

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

■ **観覧料** ◎歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
(団体は20人以上)

高校生以上……310円(団体250円)

小中学生……150円(団体90円)

両館共通で観覧される場合

高校生以上……520円(団体410円)

小中学生……260円(団体150円)

※特別展は、その都度料金を定めます。

◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。

①岐阜市在住の70歳以上の方(特別展を除く)

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けている方、及びその介護者1人

③家庭の日(毎月第3日曜日)に入館する中学生以下の方

④③に同伴する家族(高校生以上)の方(特別展を除く)

⑤岐阜市内の小中学生

◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

交通案内

◀歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館▶

JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、徒歩約5分。岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

お車でおこしの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp>



◀原三溪記念室▶

岐阜バス西部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分

岐阜バス西部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ

博物館だより No.111 2022.7

編集・発行 岐阜市歴史博物館

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

(分室) 原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階

☎058(265)0010

☎058(264)6410

☎058(270)1080